

イギリスにおけるグローバル教育

—「グローバルシチズンシップ」概念の考察—

柳 瀬 公 代

1. はじめに

1970年代以降、環境破壊をはじめとする地球的問題の顕在化のなかで、英米両国においてグローバル教育への関心が高まった。そして、学校教育の場においても、子供たちに地球的問題を学んでもらうため、カリキュラムの開発が行われた。1980年代後半、英国のグローバル教育は、「ワールドスタディーズ」の名称のもとに進められ、“Global Teacher Global Learner” (Pike and Selby 1988), “Making Global Connections” (Hicks and Steiner 1989), “World Studies 8-13” (Fisher and Hicks 1985) などの書籍で、理論、目的、具体的な活動事例が示された。そして、90年代後半これらの書籍が日本語に訳され、英国のグローバル教育の存在が、日本のNGO、教育関係者の間で知られることとなった。「地球市民性」の概念も、英米のグローバル教育が、「地球市民性」を育む教育として紹介されることで、日本の教育関係者の中で広く使用されるようになっていった。筆者も、上記の書籍を通してこの概念を知り、授業の中で使用した一人であるが、「地球市民性」という概念が意味するところを、十分に理解した上ではなかった。そこで、今回の研修では、「地球市民性」概念を3つのリサーチを通して探求していった。第一に、学術文献における「地球市民性」概念のリサーチ、第二に、ヨーク大学大学院教員養成コースで、「歴史」

或いは、「シチズンシップ」を専攻する学生へのインタビュー（彼らのグローバルシチズンシップ観のリサーチ）、第三に、イングランドにおける、中等教育用シチズンシップの教科書に提示されている「地球市民性」概念のリサーチである。

本小論では、3つのリサーチのうち、第一の学術文献上の「地球市民性」概念について考察していくこととする。第一に、西洋で発達した「シチズンシップ」概念に含まれる意味、第二に、20世紀において「グローバルシチズンシップ」概念が注目されるようになった背景、第三に、Heater (1999) が提示した 'Identity', 'Morality', 'Law', 'Politics' のカテゴリーで構成される「ワールドシチズンシップ」の意味が検討される。最後に、英国のグローバル教育の専門家が、どのような意味で、「グローバルシチズンシップ」の概念を理解、使用しているかが、Heaterの提示した「ワールドシチズンシップ」の意味との比較の中で考察される。この考察の目的は、専門家の「グローバルシチズンシップ」に関する強調点が、1990年代を境に、'Morality' から 'Law', 'Politics' へ移行していったことを示すことにある。

尚、専門家の中には、「グローバルシチズンシップ」の用語以外に「ワールドシチズンシップ」、「コスモポリタンシチズンシップ」の表現を使用する人たちがいるが、本稿では、

これらの用語は全て「ナショナルシチズンシップ」を超えたグローバルレベルのシチズンシップを現す同義語として扱うこととする。

2. 「シチズンシップ」概念について

ヨーロッパにおける「シチズンシップ」概念の起源は、古代ギリシャ時代まで、さかのぼることができる。Landrum (2000) は、グレコ・ローマン時代から 20 世紀にかけて、人々が段階的に 'Civic-republican', 'Liberal individual', 'Social citizenship' モデルの 3 種類の「シチズンシップ」概念を発達させていったことを論じている。'Civic-republican' モデルの起源はグレコ・ローマン時代にある。この時代の人々は、コミュニティの一員として生活するなかで、コミュニティの成員としての意識を持つことと、コミュニティのために貢献することがシチズンシップの意味するところであると考えようになった。17 世紀になると人々は、政府と市民の間の互恵的な関係を認識し始め、その後の市民革命を通して、国民国家を形成発展させていった。'Liberal individual' モデルは、この過程の中で育まれた。人々は自由権と参政権を獲得し、国民国家によって保障される合法的な政治的権利を含みこむ「シチズンシップ」概念を発達させた。20 世紀の中頃 Marshall (1950) によって提示された 'Social citizenship' モデルも、「シチズンシップ」概念を、国民国家政府という機関によって保証される、合法的な政治的権利を含蓄するものとして捕らえている。Landrum (2000) は、Marshall が合法的な政治的権利を、'Civil Citizenship', 'Political Citizenship', 'Social Citizenship' の 3 つに分類していると指摘している。'Civil Citizenship' とは、市民には個人の自

由があり、法の支配の下にあることを意味する。'Political Citizenship' は、人々が参政権を通して、政治的な意思決定の過程に参加する権利を有することを示す。'Social Citizenship' は適切な生活水準が市民には保証されなければならないことを意味している。

以上のことから、「シチズンシップ」概念は、3 つの構成要素から成り立っていると言えるであろう。第一は、コミュニティへの帰属意識であり、第二は、コミュニティへの貢献、或いは責任、そして第三は、国家政府という機関によって保証される合法的な政治的権利、及びその権利の行使である。

3. 20 世紀における「グローバルシチズンシップ」概念 — その社会的背景 —

Dower (2002 a) が指摘するように、20 世紀後半の地球的諸問題の顕在化やグローバル化の進行は、人々の「グローバルシチズンシップ」概念への関心を高めた。1970 年代頃より、貧困、資源枯渇、環境破壊、人権侵害などの全人類に影響を及ぼす地球的諸問題が明らかとなると同時に、これらの問題は各国がそれぞれ独自に解決できる問題でないことが認識されるようになっていった。こうした状況の中で、「ナショナルシチズン」を超えた「グローバルシチズン」として自分自身を意識する人々が現れはじめる。また、人、物、資本、情報、文化、技術などあらゆるものが、国民国家の境界を越えて行きかうグローバル化が 1970 年代以降加速化したことも、人々の「グローバルシチズン」意識を促すことに一役買っているといえよう。

そして、経済、政治、テクノロジーなどの、複雑な地球規模の相互依存性を増大させるグ

ローバリゼーションは、新しい世界観をもたらす。ウエストファリア条約以来、国民国家の集合体として見られていた世界が、グローバリゼーションの進展によって、様々な要素が相互に依存しあう一つのシステムとして見られるようになる。そして、古い世界観では、国民国家が、国際舞台の主役であったのに対し、新しい世界観では、諸個人やNGOなどの様々な組織が主役となるのである (Fujikane 2003)。

4. 「グローバルシチズンシップ」の意味 — Heater の「ワールドシチズンシップ」概念に基づいて —

第2節 (「シチズンシップ」概念について) で述べたように、「シチズンシップ」は国民国家政府によって保障される法的、政治的権利と強く結びつく概念である。それゆえ、専門家の中には、グローバルレベルの政府機関が存在しない現状において、「グローバルシチズンシップ」概念を提唱することを疑問視する人々もいる。Heater (1999) は、「グローバルシチズンシップ」の概念が法的、政治的意味を欠いたまま使用される傾向があることを指摘した上で、「ワールドシチズンシップ」概念について、法的、政治的意味も含めて検討している。

Heater (1999) は、「ワールドシチズンシップ」の意味を「あいまい」から「明確」な意味へと広がる 'Identity', 'Morality', 'Law', 'Politics' の四つのカテゴリーを使って説明している (Table 1 参照)。「Identity」は、他の動物にはない言語能力や普遍的な自然法を理解する人類種に属するゆえに、自らを「ワールドシチズン」と考える人々を含みこむカテゴリーである。個人の行動が、他者に影響を及ぼすことを自覚し、地球とその未来も含めた全居住者に対し、自分の行為に責任を負う人々は、「Morality」に分類される。このカテゴリーに属する「ワールドシチズン」は、自国の利益よりも国際社会の利益を重視する人々でもある。自然法、及びそこから派生する人権を尊重し、「世界人権宣言」のような国際的権利や国際法を遵守する人々は、「Law」に分類される。彼らは、究極的には、全世界共通の法律や裁判制度・組織の設立をめざすことになる。最後に、地球レベルの政治的意思決定に影響を与えようとする人々、或は、コスモポリタンな民主主義の参加者であろうとする人々は、「Politics」に分類される。Heater は、地球レベルで政治的権利行使するには、三つの方法があるとしている。一つは、Oxfam, Amnesty International や Greenpeace などの市民社会の諸団体に、最も

Vagu ←-----► Precise			
Identity		Morality	
Feeling of membership of humankind		Responsibility for planet and its inhabitants	
Law		Politics	
Recognition of natural, international and possible world law		Belief/participation in trans/supranational forms of political activity/institutions	

Table 1 Heater (1999) p.136より引用

簡単な形では、寄付や署名を通して参加する方法である。二つ目の方法は、すでに存在する国連のような超国家的組織の活動にかかわることである。国連憲章を守るよう、自国の政府に働きかけるのも政治的な「ワールドシチズン」の行為とみなされるであろう。最後は、民主的国際政治制度・組織としての世界政府の樹立を支持し、設立へむけて努力することである。

第2節（「シチズンシップ」概念について）において、「シチズンシップ」概念が三つの構成要素から成り立つことを指摘したように、「ワールドシチズンシップ」概念もまた、三つの構成要素に分けることができるようである。第一に、「Identity」：世界共同体への所屬意識、第二に、「Moral global citizenship」：世界共同体への責任、第三に、「Political global citizenship」：法的、及び、政治的権利の保障と行使である。

5. 「グローバル教育」における「グローバルシチズンシップ」概念

5-1 1990年代以前：「Moral global citizenship」

1980年代に、グローバル教育の専門家達は、若者が「グローバルシチズン」として生きるためには、グローバルな視野が必要であるとし、具体的に必要とされるいくつかの視野を提案した。第5節の1では、Hanvey、及びPikeとSelbyがそれぞれ提示したグローバルな視野を検討し、これらの視野が、先に述べた「グローバルシチズン」概念の構成要素の中では、「Moral global citizenship」を育むことに貢献したことを指摘したい。

Hanvey (1982) は、五つの習得されるべきグローバルな視野を提案している。第一は、「Perspective consciousness」であり、これは一人一人、自分の世界観が普遍的なものでは

ないことを認識し、多様な視点を受け入れることを意味する。第二は「State of the planet awareness」であり、私たちは、人口増加、移民、経済状況、資源、環境、国際的または国内的な紛争等の世界の現状について気づくべきであることを意味する。第三の「Cross-cultural awareness」は、文化の多様性に私たちは気づくべきであることを意味する。第四の「Knowledge of global dynamics」は、全ての要素が相互に影響し合う一つのシステムとして世界をとらえる視点である。第五の「Awareness of human choices」は、一人一人の決断が、世界中の他の人々に影響を与えるのだという視点を持つべきことを示している。

これら5つの視点の内、「Perspective consciousness」や「Cross-cultural awareness」の視点を身につけ、多様な考え方や文化を尊重する態度を養うことは、責任ある「グローバルシチズン」であるための前提条件として大切であろう。また、「Knowledge of global dynamics」や「Awareness of human choices」の視点は、他者との相互依存性についての理解を深め、人々を他者への責任を果たす「グローバルシチズン」へと導くであろう。

Hanvey の影響を受けた、PikeとSelby (1988) も、相互依存性と多様性を理解することが重要であると強調している。彼らは、相互に影響しあう四つの次元からなる、彼ら独自のグローバリティに関する見方とグローバル教育の五つの目標を提示している。彼らは、四つのグローバルな次元を「Spatial」、「Temporal」、「Issues」、「Human potential」と呼んでいる。そして、五つの目標は、「Systems consciousness」、「Perspective consciousness」、「Health of planet awareness」、「Involvement consciousness and Preparedness」、「Process

mindedness' から構成されている。

今日、私たちにとって、国外で生産されたものを消費することなく生きることは不可能である。さらに、世界のどこかで起きた出来事が、世界の他の地域に影響を及ぼすこともよく知られている。このように、私たちが、世界の他の人々と関係を持たずに生活することは非常に困難なことから、PikeとSelby(1988)は、グローバリティは空間的(Spatial)な相互依存性をおびていると指摘している。そして、彼らは、例えば、環境破壊がその起源を過去に持ち、また未来の世代にも影響を与えることから、相互依存性が空間的のみならず、時間的(Temporal)であることも指摘している。次に、問題(Issues)の次元は、環境汚染、人種差別、核の脅威などのグローバルな諸問題を意味する。グローバルな諸問題は、世界の各所に、現在、未来を問わず影響を与え、諸問題自体も互いに影響しあうので、空間的、時間的次元に結びつく特徴がある。空間、時間、問題の三つの次元は、自己の外部の世界を知ること、即ち、外への旅(our outer world)であるのに対して、人間の可能性(Human potential)の次元は、内面への旅(our inner reality)を意味する。PikeとSelby(1988)は、外部の世界の真実を知り、理解を深めることで、人々は内面的に変化し、新たな視点を獲得すると考え、次のように述べている。

「外への旅はまた、内面への旅である。二つの旅は、相補的であり、互いに刺激しあう。」(P.31)

PikeとSelby(1988)は、四つの次元を、グローバル教育の五つの目標に反映させている。第一の'Systems consciousness'は、生徒に、世界の諸現象や出来事は互いに結びついており、複雑で、相互的で多層に重なり合

う網の目を形成していることを、理解させようとするものである。そして、生徒に、彼ら自身も、網の目上の一点として存在し、諸現象や出来事につながっていることを認識させることを目標としている。第二の'Perspective consciousness'は、生徒に、彼らの世界観は普遍的なものではなく、世界には多様な視点が存在することを認識させようとするものである。第三の'Health of planet awareness'は、生徒に、富の分配、人口増加、発展のタイプ、人間の活動の環境への影響、国際関係の緊張、人権などの地球の現状、発展と傾向に気づかせ、理解させることを目標としている。また、これらの地球の諸問題を、過去及び未来の視点から、そして、正義や人権に関する十分な理解に基づいて考察することを、生徒に期待している。第四の'Involvement consciousness and Preparedness'は、生徒が、各自の行為が他者や地球に影響を及ぼすこと、地球の諸問題の解決は、各自がどのような行動をとるにかかっていることに気づかせることを目標としている。そして、将来、民主主義政治の参加者として正しい行動をとるために必要なスキル(批判的に考える力、平和的に交渉する力など)を身につけさせることを目標としている。最後の'Process mindedness'は、学習と個人の知的、精神的発達には、限りがないこと、新たに獲得した視点でさえ、将来は変化を強いられることもあることを、生徒に気づかせることを目標としている。

以上のように、PikeとSelbyは、世界全体を複雑な多層構造の網のようなシステムとしてとらえ、その網の目上で起こる諸現象、さらには、網の目上の一点に存在する諸個人は、相互に影響し合っていると考えている。こうした世界観に立つ彼らは、グローバル教育の目

標を、生徒に網の目の一点に存在することを認識させ、生徒達の行動は常に、世界の人々、諸現象、出来事に影響を与えることに気づかせることだと考えているようである。世界中の人々、諸現象、出来事との間につながりを見いだす人は、他者及び、地球に対して責任ある行動をとるにちがいない。そして、網の目の一点として、自分の存在を認識する人は、地球的諸問題を自分の問題として考え、それらの問題を改善するため行動しようとするであろう。1990年代以前のグローバル教育は、諸個人、諸現象、出来事の相互依存性の理解に焦点を当て、他者、地球に対する責任を果たす市民、即ち、Heaterの提示したワールドシチズンシップのうち、第二のカテゴリー‘Morality’に相当する市民性を育成することに、貢献したと言えよう。

5-2 1990年代以降：‘Political global citizenship’

1990年代以降、「グローバルシチズンシップ」をめぐる議論は、市民がいかに権利と責任をグローバルレベルで行使するのかという、コスモポリタンデモクラシーのあり方に焦点を当てるようになっていった。即ち、議論の焦点が、‘Moral global citizenship’から‘Political global citizenship’へ推移していったといえる。第2節（「シチズンシップ」概念について）において述べたように、これまで市民は権利と責任を国家によって保障され、国家という政治的機関を通してそれらを行行使してきた。しかしながら、急速なグローバル化の進行は、国家という政治機関を通してでは、市民が、国家の領域を越えたところで権利と責任を行行使することに限界があることを露呈するようになった。Axtmann (2002) は、国家のレベルを越えたコスモポリタンデモクラシーの実現に、国家

という政治機関があまり効果的でないことを次のように指摘している。

「グローバル資本主義、労働のグローバルな分業、核兵器のグローバルな増殖、グローバルな環境問題や国境を越えて広がる危険な病気、グローバル化する観光、大量移民、そしてグローバルなメディアやコミュニケーションネットワークは、今日、国家の政治的機関としての効力に挑戦するものである。」

こうした政治的機関としての国家の力が低下する中で、専門家達は、市民がグローバルレベルの政治的決定に参加し、グローバルデモクラシーを実現するためのいくつかの方法を提案している。例えばDower (2002 b) は、世界政府、或は、世界連邦国家を設立すべきであると主張する人々がいることを指摘している。他には、国際連合を改革する方法が提示されている。Axtmann (2002) はこの方法を提案しているHeldの考え方を次のように紹介している。

「国際連合に関して、Heldは、世界中の市民によって民主的に直接選ばれた人々による新たな総会を創設することを提案している。そして、Heldは、選出された代表者の役割は、諸国家、非政府組織、市民グループや市民運動家などで取り決めた、国際的に合法的な協定に基づいたものでなければならないと述べている。」

最後に、各国の政党、非政府組織や世界に広がる様々な市民のネットワークなどの現存する組織を通して、グローバルシチズンとしての権利と責任を行行使することも可能である (Dower 2002 b)。このような形でのコスモポリタンデモクラシーの実現については、Anker (2002) も、WTOなどのグローバルな組織や多国籍企業の意味決定に影響を及ぼすため活動するグループが、その規模、数とも

に拡大しつつあると指摘している。

こうした、コスモポリタンデモクラシー、言いかえれば、‘Political global citizenship’に関する議論を受けて、グローバル教育の焦点も、1990年代以降、‘Moral global citizenship’から‘Political global citizenship’へ推移していった。Oxfamは、1997年に‘A Curriculum for Global Citizenship’を提案している。このカリキュラムにおいてOxfam(1997)は、若者たちがコスモポリタンデモクラシーの参加者として、グローバリゼーションを良い方向に導き、よりよい世界を形成するために役立つ知識、技術、価値と態度を身につけるべきであることを強調している。OslerとVincent(2002)も、グローバリゼーションが望ましくない諸側面をもち、誰にも、グローバリゼーションを止めることができないなら、今、問題にしなければならないことは、いかにグローバリゼーションを止めるかではなく、いかにグローバリゼーションに影響を与え、良い方向に形作るかにあると指摘している。彼らは、グローバル教育が、どのようにグローバリゼーションとグローバルレベルの民主主義化の過程に答え、そして、どのように学習者を、これらの過程に対応できるように導くかについて検討している。彼らは、民主的な国際機関が効果的に機能するために必要なくつかの前提条件を次のように提示している。諸個人や諸集団は、

- 1 共通の人間性と相互依存性を認識すること。
- 2 グローバル共同体への帰属意識をもつこと。
- 3 グローバリゼーションの犠牲者への一体感をもつこと。
- 4 ローカルからグローバルまで、あらゆるレベルでの民主主義に参加する権利

を行使すること。

一般的に、共同体への帰属意識をもたない人は、共同体の発展のために貢献しようとはしないであろう。それゆえ、OslerとVincentは、民主的な国際機関の発展は、共通の人間性と相互依存性を認識し、グローバル共同体への帰属意識をもつ人々によって達成されると考えているようである。言いかえれば、彼らは、グローバルシチズンをグローバル共同体への帰属意識をもち、民主的な国際機関の発展のため貢献する存在として理解していると言えよう。そして、彼らは、民主的な国際機関の発展に貢献し、コスモポリタンデモクラシーに参加し、グローバルシチズンとしての権利と責任を行使していく‘Political global citizenship’を育成することが、グローバル教育の使命であると考えているようである。

6. おわりに

ヨーロッパにおける「市民性」概念は、ナショナルシチズンシップと深く結びついており、それは、1. コミュニティーへの帰属意識、2. コミュニティーへの責任、3. 政治機関によって保障される合法的な政治的権利とその行使という三つの構成要素からなる概念である。しかし、1990年代以降のグローバリゼーションの急速な進行によって、専門家の間で、「市民性」の概念を、ナショナルシチズンシップを越える概念としてとらえ直すとする動きが強まった。こうした動きの中で、グローバルシチズンシップの概念が注目をあび、その内容についての議論が高まっていった。グローバルレベルでは、国家政府のような政治的機関を持たない現状において、グローバルシチズンシップの概念の存在そのものを否定する声もあったが、Heaterによって、「市民性」概念を構成する三つの要素を含

みこむ、ワールドシチズンシップ概念が提示された。

1980年代後半、ワールドスタディーズの名称のもとで進められたイギリスにおけるグローバル教育は、世界を各自の行動や諸現象が互いに影響しあう、網の目のようなシステムとしてとらえ、相互依存性の理解に力を入れた。この結果、グローバル教育は ‘Moral global citizenship’ の育成に貢献することとなった。しかし、その後の1990年代以降、グローバル化は急速に進展し、同時に、様々な地球的諸問題を生み出していった。こうした状況の中で、単に他者及び地球への責任を果たす ‘Moral global citizenship’ の育成だけではなく、システムそのものを良い方向へ形作っていくため、コスモポリタンデモクラシーに参加し、グローバルシチズンとしての政治的権利を行使する ‘Political global citizenship’ の育成がグローバル教育の課題となった。

1980年代後半のワールドスタディーズの成果が、日本に紹介されたのは1990年代以降のことである。本稿で検討した Pike と Selby による “Global Teacher Global Learner” の日本語訳本も1997年に、『地球市民を育む教育』というタイトルで出版された。従って、現在、日本では、「グローバルシチズンシップ」概念は、Heater の提示した「ワールドシチズンシップ」の意味の中の ‘Morality’ に重点をおいて捉えられている傾向がある。グローバル共同体の一員として巣立っていく、子供たちに、どのような「地球市民性」を身につけさせるべきか、即ち、この概念の意味を教育者自身が、今後、十分に検討していく必要がある。そして、その上で、日本の学校教育の現場においても、‘Moral’ に加えて ‘Political’ なグローバルシチズンシップを育成するカリ

キュラムを開発していくことが必要であろう。

参考文献

- Anker, C. (2002) “Global Justice, Global Institutions and Global Citizenship”. In N. Dower and J. Williams (eds) *Global Citizenship: A Critical Reader* (pp.158-168). Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Axtmann, R. (2002) “What’s Wrong with Cosmopolitan Democracy?” In N. Dower and J. Williams (eds) *Global Citizenship: A Critical Reader* (pp.101-113). Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Dower, N. (2002 a) Introduction. In N. Dower and J. Williams (eds) *Global Citizenship: A Critical Reader* (pp.30-40). Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Dower, N. (2002 b) “Global Citizenship: Yes or No?” In N. Dower and J. Williams (eds) *Global Citizenship A Critical Reader* (pp.30-40). Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Fisher S. and D. Hicks (1985) *World Studies 8-13: A Teacher’s Handbook*. Edinburgh and New York: Oliver & Boyd.
- Fujikane, H. (2003) “Approach to Global Education in the United States, the United Kingdom and Japan”, *International Review of Education*, 49 (1-2), 133-152.
- Hanvey, R. (1982) “An Attainable Global Perspective”. *New York: Global Perspective in Education, INC.*
- Heater D. (1999) *What is Citizenship?* Cambridge: Polity Press.
- Hicks D. and Steiner M. (1989) *Making Global Connections: A World Studies Workbook*. Edinburgh and New York: Oliver &

- Boyd.
- Landrum, D. (2000) "The Historical Development of the Theory and Practice of Citizenship and Citizenship Education: Classical Ideals to Contemporary Issues". In K. Crawford and K. Straker (eds) *Citizenship, Young People and Participation: Conference Proceedings, 1 December 2000 Chorley, Lancashire, UK* (pp.25-41) . Stoke-on-Trent: JPC Publishing.
- Marshall, T.H. and Humphrey, T. (1992) *Citizenship and Social Class: T.H. Marshall and Tom Bottomore*. London: Pluto Press.
- Osler, A. and Vincent, K. (2002) *Citizenship and the Challenge of Global Education*. London: Trentham Books Limited.
- Oxfam (1997) *A Curriculum for Global Citizenship*. Oxford: Oxfam.
- Pike G, and Selby, D (1988) *Global Teacher Global Learner*. London: Hodder and Stoughton.
- やなせ きみよ ——
- 海外研修：金城学院中学高等学校教諭